

王朝文学文化研究会 土曜部会 平成二四年六月二三日
『古今和歌集』【巻第一 春歌上 五六番歌】
通信 科目等履修生 美濃島 千鶴

五六番歌

【本文】

花ざかりに京を見やりてよめる
見わたせば柳桜をこきまぜて宮こそ春の錦なりける

【歌意】

花盛りの時に都を遠く眺めて詠んだ歌

はるかに眺望すると、緑の柳と紅の桜をみごとに織りなして、この平安の都そのものが春の錦を敷き延べたようである。

【校異】○花ざかりに―花のさかりに（善・筋・元・公・関・俗・静・六・永・前・天・伏・経）○見やりて―みやりはべりて（経）○よめる―ナシ（筋・元・経）○作者名ナシ―素性法師（筋）―素性（元）

【他出文献】◇新撰和歌 五一。◇古今六帖 第二「都」一三三五
◇素性集 九

【語釈】

○京を見やりてよめる

・『新全集』―京都の周辺の山から見おろしたものである。

・『日本古典文学研究資料』高台で、都を遠望して詠んだ歌。具体的な場所は不明。

○見わたせば

・『新大系』―京の都を遠くから見わたすと。

・『松田新釈』―広くあちこちをみると。「ば」は、已然形接続の確定条件の意を示す。いくらか高い、東山のあたりから見下ろしたものであろう。

・『新大系』―京の都を遠くから見わたすと。

・『日本古典文学研究資料』都のはしからはしまで全部眺めてみること。

・『片桐全評釈』―距離をおいて空間的に見はるかすのである。

※み―はるか・す（見霽かす）（他五）―遙かに見渡す。見晴らす。祝詞。

◆「見わたせば」は、『古今集』では一例しかない。他には、『土佐日記』『躬恒集』に一例ずつである。ところが、『万葉集』では一三例（うち八例が初句で用いられている）

神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 大和の国は（中略）
大和の 大国御魂 ひさかたの 天のみ空ゆ 天翔り
見わたしたまひ 事終わり 帰らむ日には（以下略）

（巻五 894 好去好來の歌 山上憶良）

やすみしし 我が大君（中略）伊勢の国は 国見ればしも
山見れば 高く貴し 川見れば さやけく清し 水門なす
海も広し 見わたす 島も名高し（以下略） 卷十三

3234

のように、元来『万葉集』の「見わたす」は、国見による国ぼめの呪性を宿す言葉であったと言える。

○柳桜

・『大系』―柳は土木工事の資材とするために堤や道ばたに植える（宮繕令）ので遠望の都を区画する線になる。

※宮繕令―養老令 二（堤内外条）堤の内外、併せて堤の上には、たくさん榆（やまにれ）、柳、雑樹を植えて（補強し）、堤堰（せき）の資材に充てること。

・『片桐』―朱雀大路に街路樹として柳を植えていた。桜は当初は山のものであったが、次第に貴族の家々の庭に植えられる。

○こきまぜ

※こき・ま・ぜる【扱混】―日本国語大辞典

【他ザ下二】**コ**こきま・ザ【他ザ下二】（「こき」は接頭語）二種以上のものをまぜあわせる。かきまぜる。元来は、色のついたもの（主として赤系の）を細かにちぎってまぜることをいう。

・『大系』―こちやこちやに混ぜて。

・『竹岡全評釈』―今日いう稲こき、しこくなどと同様に、木の葉や花を枝や茎から、手などでしごいてもぎ落として、ばらばらにして、さらに混合することを「こきまぜ」という。

「御箱の蓋にいろいろのはな・もみじをこきまぜて」（源氏・少女）

・『窪田評釈』―「こきまぜ」は一つの詞。「こき」は、稲をこくなどというそれで、「まぜ」の意の強いもの。口語の「まぜこぜ」というに当たる。

・『松田新釈』―まぜ合せ。つきまぜ。「こき」は、もとは、「稲をこく」などの「こく」であろうが、接頭語で、「まぜ」を強めている。

・『金子評釈』―打ち交ぜて、入れまぜてなどと同じ。「こき」は、すこくなどいふ意の語だが、ここでは軽い接頭語。

○宮こそ春の錦なりける

・『新大系』―「ける」新たな認識の表現。秋の錦が山のものであることをおさえて、春の錦の発見の驚きを言う。

・『松田新釈』―都は、いま、春の錦で飾られているよ。「ぞ」は、特に一つを指示するという意の係助詞、ここでは、周囲の春の山でなく、都をとりたてていった。「錦」は譬喩で、柳や桜の緑と白を縦横の糸として、美しく織りなした織物の錦に見立てた。原拠を、「洛陽三月春如錦」とすれば、漢詩的発想であり、

「秋の錦」からの連想であるとすれば、和歌的思考である。また、二つの合体だとすれば、和漢詩想の合体的形象化となる。

「ける」は詠嘆の助動詞「けり」の連体形で「ぞ」の結び。
・『竹岡全評釈』―「秋の錦」は見たり聞いたたりしているが、漢詩に詠まれている「春の錦」というのは、この都を眺望した景がまさにそれであったのだ、と発見した気持ち「ぞ」なりける」に表わされている。

【鑑賞】

都を讚美した心である。歌としては特色のあるものである。都の全体を大きく捉えているところ、柳と桜とを色において捉え、それを錦という、人事的のものをもって喩えているところ。「ぞ」

の「ぞ」で「秋錦」との比較を暗示している。この特色は、この時代を通じてのもので、その前例をなしているものといえる。漢詩文の素養を土台に、柳と桜をこきまぜることによって新し

い錦を創造した、まさにモダンな最先端をいく和歌表現だった。
五七番歌

【本文】

桜の花のもとにて、年の老いぬる事を嘆きて
よめる
色も香もおなじ昔にさくらめど 年ふる人ぞあらたまりける

【歌意】

桜の花の下で、我が身が年老いてしまったことを
嘆いて詠んだ歌

この桜は色も香りも昔と同じに咲いているようだが、その木の下で年を過ごしている人だけが新たに変わったことだなあ。

【校異】○花のー木の(善) ○年のおいぬるーとしおいぬる(関)

○よめるーナシ(筋・元・公) ○よものりきのともりの(亀・基・筋・公・歴・昭・寂・伊) ○おなじ昔にーむかしながらに(経・永イ・前イ・天イ・伏イ)

【他出文献】◇古今六帖 第六 「桜」四一九五 ②「むかしながらに」◇友則集 四 ② 「むかしながらに」

【語釈】

○友則＝『古今集』撰者の一人。『古今集』完成途中に没。
○色も香も

・《松田新釈》―桜の花の色も香も。「も」は並列の副助詞。

・《片桐全評釈》―桜の香をよんだめずらしい例。

・《窪田評釈》―「香」は、香を愛する当時の風から、愛でたい桜にも香のある事としたと見える。

○同じ昔に

・《全集》―「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。

・《松田新釈》―昔同様に。

・《片桐全評釈》―変わらない昔のままに。やや熟さない言い方であるので、「昔ながらに」という雅経本が生まれたのであろう。

○KAWAGUCHI

・《新全集》―「らめ」(終止形は「らむ」)は、作者が必ずしも毎年見に来ているわけではないので、多分今年も昔と同様なのだろう、と推量していることを表わすために用いた助動詞。
・《松田新釈》―咲くようであるが。物名「さくら」をよみこんである。「らむ」の現在推量の助動詞の意味から考えると、詞書の「桜のもとにて」と矛盾する。本来ならば、「さけれども」とすべきであるが、「さくら」を詠み込むために「さくらめど」とした。同じ技法をもちいた歌が夏歌にある。「あわれてふことをあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらむ」一三六

・《片桐全評釈》―友則は、「梅」という字を「木」と「毎」に分けて「雪降れば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし」(冬・三三七)と詠んでいるように、言葉遊びが得意であったので、「さくら」を詠み込んでいるという説は、否定し切れないものがある。

・《竹岡全評釈》―助動詞「らむ」の機能により、臨場感を持った歌になっている。「さくら」を物名として詠み込んでいる

とする説があるが、詞書がない場合には、それにより効果をあげることになるが、詞書にすでに桜のことは明言してあるので、詞書との関連から、歌の中では「さくら」は面影の程度にとる方がよい。

・《窪田評釈》―「咲くら」で、同音の桜を暗示している。部立となつている「物名」と同じ詠み方である。

・《集成》―咲いているようだが。婉曲表現。「咲くら」に「桜」を詠み込んでいると見る説もある。

○年ふる人ぞ

・《新全集》―年を経たわれわれ人間。

・《松田新釈》―老人、つまり自分を指す。「ぞ」は「桜」に対して「年ふるひと」をとりたてていった。

・《窪田評釈》―「年ふる人」は、年を経ている人で、老いた人。その「人」は自身を客観的にいったもの。「ぞ」は、桜に較べて「人」の方を取りたてた意のもの。

・《片桐全評釈》―詞書に言うように「桜の木の下で年ふる人」の意。「ふる」と「あらたまる」が対応している。「ももちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく」(春上・二八)。人とは、一般化して「人」といつているが自分

が中心。古今集に多い表現である。

桜の木の下でただ老いを嘆くだけではなく、「昔の人は死んでしまつて、新しい人に入れ替わつたことを嘆いているのだ」という見解をとっている。単なる老化だけでなく、人の死や世代の交替まで暗示していると捉える。

○あらたまける

・《新全集》―以前と違った姿になること。ここでは老人らしくなること。二八番と同様の嘆老の歌で漢詩と似た点もある。

・《松田新釈》―桜の同じ状態に対して、自分の姿の変わった事を示す。「あらたまる」は白髪になったり、しわがよつたりする意。「ける」は詠嘆の助動詞「けり」の連体形で、「ぞ」の結び。

・《片桐》―新しい人になる。昔の人は死んでしまつて新たな人が同じく年を過ごしていると言うのである。二八番の「物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく」のように「新しいものに代わる」という意。唐の劉廷芝の「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」と同じ心を詠んでいる。

【鑑賞】

桜の花のもとで、昔に変わらず咲く花を見つつ、ふと、変わりゆく我が身を思い、感慨にふけるという歌意で、咲く花と自己とを一体化し、それに陶醉する心境とは異なるものがある。咲く桜をきっかけに、人の心に翳を宿す老年の寂しさを歌いあげたこの歌は、同じく咲く桜の歌でも、これまでのものとは、歌境を異にしている。これは、桜花に対する人間感情の様々なありさまを幅広く表現しようとする撰者たちの意図によるものである。

【配列】

・五六番歌が眺望の歌だったのに対し、五七番歌は視近距離の樹下の歌であるように、「桜」を遠近で配列し、また、漢詩文に培われた表現を踏まえ、様々に発展させた歌を殊更並べている。さらに、前述のように、桜花に対する人間感情の様々なありさまを幅広く表現しようとする撰者たちの意図による配列がなされている。



浅葱地五枚笹柳桜模様縫箔

桃山時代 十七世紀

(東京国立博物館蔵)

五六番歌「柳桜をこきまぜて」が後の服飾史に与えた影響は大きい。柳も桜も大胆に描いた桃山時代の豪華さが窺われる。

【参考文献】

- ・『新編日本古典文学全集』 小学館
- ・『新日本古典文学大系』 岩波書店
- ・『古今和歌集評釈』 上巻 東京堂出版
- ・『古今和歌集全評釈』 上巻 講談社
- ・『古今和歌集評釈Ⅰ』 窪田空穂 角川書店
- ・『日本古典文学全集』 小沢正夫 小学館
- ・『古今和歌集表現論』 笠間書院
- ・『古今和歌集全評釈』 竹岡正夫 右文書院
- ・『古今和歌集全評釈』 片桐洋一 講談社
- ・『新釈古今和歌集』 松田武夫 風間書房